

ひふみ神示 (10) サブタイトル道 読み解き

神も人間も同じであると申してあろう。同じであるが違ふと申してあろう。それは大神の中に神を生み、神の中に人民を生んだためぞ。自分の中に、自分を新しく生む時は、自分と同じカタのものを生む。大神弥栄なれば、神も弥栄、神弥栄なれば人民弥栄ぞ。困るとか、苦しいとか、貧しいとか悲しいとかいうことないのであるぞ。道ふめと申すのは、生みの親と同じ生き方、同じ心になれよと申すことぞ。人民いくら頑張っても神の外には出られんぞ。神いくら頑張っても大神の外には出られんぞ。

過去も未来も中今。神も人間と同じで、弥栄して行くぞ。悪いクセは直さねばいつまでたっても自分に迫って来るもの変わらんぞ。おかげないと不足申しているが、悪いクセ、悪い内分を変えねば百年祈り続けてもおかげないぞよ。理屈なしに子は親を信ずるぞ。その心で神に対せよ。神が親となるのじゃ。目と口から出るもの。目の光と声とは、実在界にも実力持っているのであるぞ。力は体験を通して出るのであるぞ。

カタは形を持たねばならん。念は語ることによって現れるのぢや。氣が無くなればなるほど〇は有となるのであるぞ。このことよくわかりて下されよ。肚の中のゴモク捨てるとうよくわかる。

キが元と申してあろうがな。人民はすべてのもののキ頂いて成長しているのであるぞ。キ頂けよ。横には社会のキを、縦には神の気を、悪いキを吐き出せよ。見分ける鏡与えてあるでないか。道わからねば人に訊くであらうが。わからんのにわかった顔して歩き廻ってはいはならん。人に尋ねよ。天地に尋ねよ。神示に尋ねよ。

ウとムは相たがいに相反するものであるが、これが一つになって動く。ウム組み組みてと、申してあろうがな。今の人民の智ではなかなか解けん。ウの中心はム、ムの廻りはウであるぞ。中心は無限、周囲は有限であることを知れよ。

上に立つ者ほど働かねばならん。働いても力は減らん。働くにはキ頂かねばならん。キから力生まれるのであるぞ。働くと申しても動くばかりでないぞ。動かんのも働き、動くのも働き、よく心得よ。寄せては返し、寄せては返し、生きているのであるぞ。始めの始めと始めが違ふぞ。後になるほどよくなるぞ。終わりの中に始めあるぞ。祈り、考え、働きの三つ揃わねばならん。

ウはムであるぞ。ウとは現実界ぞ。ムとは霊界であるぞ。ウもムも同じであるぞ。ムからウ生まれて来ると申してあること、よく心得よ。神の仕組、狂いないけれど、人民には判らねば、それだけこの世界の歩みおくれるのぢや。この世は人民と手引かねばならんから、苦しみが長くなるから、千人万人なら一人ずつ手引いてやりてもやりやすいなれど、世界の人民、動物虫けらまでも助ける仕組みであるから、人民早う改心せねば、氣の毒いよいよとなるぞ。

統一ということは赤とか白とか一色にすることではないぞ。赤あれば黄もあり青もあるぞ。それぞ

れのものは皆それぞれであって一点のキでくくる所に統一あるぞ。くくると申してもしばるのではないぞ。磁石が北を向くよう、総て一点に向かうことであるぞ。これを公平と申し、平等と申すのぢや。悪平等は悪平等。一色であってはならんう。下が上に、上が下にと申してあるが、一度で治まるのではないぞ。幾度も幾度も上下にひっくりかえり、又ひっくりかえりビックリぢや。ビックリこねまわしぢや。

「神も人間も同じであると申してあろう。同じであるが違うと申してあろう。それは大神の中に神を生み、神の中に人民を生んだためぞ。自分の中に、自分を新しく生む時は、自分と同じカタのものを生む。大神弥栄なれば、神も弥栄、神弥栄なれば人民弥栄ぞ。困るとか、苦しいとか、貧しいとか悲しいとかいうことないのであるぞ。道ふめと申すのは、生みの親と同じ生き方、同じ心になれよと申すことぞ。人民いくら頑張っても神の外には出られんぞ。神いくら頑張っても大神の外には出られんぞ。」

読み解きその 61

言霊は原理を教えてください。ひふみ神示は生き方を教えてください。

神と同じ道ふめとは同じ生き方、同じ心になれ つまり初めの光りのフレーズを思い出して下さい。光りは神から人民に与えている。光りに向かうから照らされる。神の歡びが光となってキ真善美愛となり、その裏の、○（身）偽悪醜憎なって現われる。つまり神の歡びの光りに向かえば照らされキ真善美愛になるということになる。

困るとか、苦しいとか、貧しいとか悲しいということはないのである。つまり起こる事実の光に当たる側を見なさいということ。霊線をそこに向けよということ。そうすると影を見ることで現われる○（身）偽悪醜憎は現われないとっている。それが神の心ということか

・ ・ 62 に続く

ひふみ神示 (10) サブタイトル道 読み解き

その 62 読み解き

「過去も未来も中今。神も人間と同じで、弥栄して行くぞ。悪いクセは直さねばいつまでたっても自分に迫って来るもの変わらんぞ。おかげないと不足申しているが、悪いクセ、悪い内分を変えねば百年祈り続けてもおかげないぞよ。理屈なしに子は親を信ずるぞ。その心で神に対せよ。神が親となるのじゃ。目と口から出るもの。目の光と声とは、実在界にも実力持っているのであるぞ。力は体験を通して出るのであるぞ。」

過去も未来も中今。この解釈は言霊が理解できないと簡単でないです。先天的に働く人間の創造意志（父韻）は八つの父韻で表されます。意志の働き方は4つの次元に（ウオアエの心の構造）それぞれに八通りしかありません。言霊読み解きその 35 とその 36 参照して下さい。

父韻が働き母音と掛合わさって音（バイブレーション）が出ると現象化が始まります。この時働く父韻は火花のようにその瞬間瞬間に働きます。 現実に創造活動は父韻が働くその瞬間瞬間にしか

行われなぬのです。過去のことを思う自分 未来のことを思う自分 それを思う自分は今の瞬間にしか創造活動が出来ないのです。だから中今（今という瞬間にわれわれは創造意志を使っているのです。）を指しています。

悪いクセつまり瞬間瞬間に心を使わず今に生きていないのです。

過去の事にこだわり心をそこに置いたままであるということは創造活動の時間を過去の思い出で潰しています。また自我の思いに明け暮れひとりよがりの未来の事を夢見続けているということはそこに活動がない限り矢張り未来の思いにふけている間、創造活動の出来る大切な自分の時間を潰しています。眼からは氣が出ています。口からは言葉が出ます。口から出る言葉は（父韻と母音が掛合わさっているのも氣を乗せて運びますから氣が出ています。つまり力があるということです。力は体験を通して出るとは雰囲気はなんとなく想像出来ますが、これは言霊ウとか言霊オに生きる間は言霊エの実践智の世界の人間の心の力は発揮できないということ

・ ・ その 63 に続く

ひふみ神示 (10) サブタイトル道 読み解き

その 63 読み解き

「カタは形を持たねばならぬ。念は語るることによって現れるのぢや。氣が無くなればなるほど〇は有となるのであるぞ。このことよくわかりて下されよ。肚の中のゴモク捨てるとうよくわかる。」

その 63

語るということは言葉で話すことつまり現象化が始まったということ、何かを見えるものに現わして行くには先ず語ることで形が出来てくる。そこに氣を流し続けると言うことは常にことあるタイミングで語るることによって形がしっかりしたものになってくる。勿論語りながら日頃はそれを忘れ中今に生きることで現実化するということ

氣がなくなると人間も身体が動かなくなります。つまり死に近い状態となります。〇（身）も氣の流れがなくなるほど柔軟性がなくなり固まりついには死にさらに氣の流れがなくなると崩壊していきムに帰します。身が固まるということはウの極限状態（崩壊寸前）のこと

肚の中のゴモクとは言霊オの経験知であれこれ考えながら行うことです。それは経験知の中から外には出られない状態となるからです。

ゴタゴタ考えないで（ムになり）その時全身全霊で物事に当たり浮かんで来たことを信じて行くことが大事である。ムであるということはウを産むということ、（ムだからウが生まれる）それが言霊オから言霊エへの移行ということ、そうすると考えもしなかった結果が現われる世界を知ることになる。それも言霊オの世界より遙かに広い大きい世界、言霊エを知ることになる。

・ ・ その 64 に続く

ひふみ神示 (10) サブタイトル道 読み解き

その 64 読み解き

「キが元と申してあろうがな。人民はすべてのもののキ頂いて成長しているのであるぞ。キ頂けよ。」

横には社会のキを、縦には神の気を、悪いキを吐き出せよ。見分ける鏡与えてあるでないか。道わからねば人に訊くであろうが。わからんのにわかった顔して歩き廻ってはならん。人に尋ねよ。天地に尋ねよ。神示に尋ねよ。」

読み解き

全ての元はキつまり（母音ウオアエイのバイブレーション）、この世界に現れ出るということはこのキのエネルギーが元になっている。縦には大自然の神のキ、横には社会のキ人間社会が作り上げたキ、物として現れ出た物は全て背後に霊的な物がついているつまりキがあるということ、木々には自然のキがあり、また人間が作り上げたもの、たとえそれが住んでいる家でも家が出す気があり、使う道具でもその内にキがあり、また同時に長く使うと使われる人のキが入っていく。

身の回りの物全てに心を向けて語りかけると言うことは霊的波動を一致させキの交流を行うことである。自分が所有するということはその物に自分のキを転写することになる。だから悪いキを吐き出せよ。とはそのものが作り上げられてくる過程で中に織り込まれたキは様々な物があり、影の思いの強いキが入った物はそのキの影響を受けてしまう。だから中古品は前の持ち主の思いが入り込んでいるため注意する必要がある。

そういう影の思いの入ったキは吐き出せ。良くないと言っている。

見分ける鏡とは自分がそのもののキを吸い入れたときに自分の身体が反応するわずかな感覚の変化を捉えると気持ちがいい物は大丈夫である。気持ちが落ち着かない、暗くなるそんな物は悪い気である。心が明るくなるか暗くなるかで判定できる。ひふみ神示には良いものは、それは下肚にぐっと力がみなぎる感じである云っている。それを感じるには心を仙骨前に鎮めていることが条件になる。

わからなければ信頼できる人に尋ねよ。天地に尋ねよとは、その事を意識しながら天地のキを吸い入れるのであるその時身体に入ってこないときは駄目、身体全身を通り抜けるキを感じる物は大丈夫ということ。それでも駄目なときはひふみ神示を開けて読めということ。

・ ・ その 65 に続く

ひふみ神示 (10) サブタイトル道 読み解き

その 65

「ウとムは相たがいに相反するものであるが、これが一つになって動く。ウム組み組みと、申してであろうがな。今の人民の智ではなかなか解けん。ウの中心はム、ムの廻りはウであるぞ。中心は無限、周囲は有限であることを知れよ。」

読み解き

ウとムは相互いに相反する物であるが、これが一つになって動くとはウは形ある物（身）、ムは形無いもの（霊=心）が一つになった物が人間という生き物である。これが一つになって動くのがこの世の仕組み。別ないいかたをすれば男の心の内の魂は女、女と現れ出た者の魂は男になっている。そうならないとキの力が働かない。電池プラウとマイナスの様な関係であり、そこに心が働きキが流れて氣の力となる。

ウの中心はムつまり心の働きのムが無いものはウとなり現れ出ない。中心の心がムであり無なので自由に無限に広がる。周囲は有限つまり身体は有限である。

身体を意識するという事は身体の有限に制限を受けて自由な発想が出てこない。ムが中心の時は自由な発想が出来新しい創造がどんどん出来るようになっていく。その二つが一つになって動くのであるということ。いつも中心に戻れということ。外にとらわれると身動きできなくなる。ただ中心のムだけでも駄目であるウとくみくみて創造の力となって現われる。正反対の陰陽（ウとム）がないと氣の流れは起こらないのである。

その66に続く

ひふみ神示 (10) サブタイトル道 読み解き

その66

「上に立つ者ほど働かねばならん。働いても力は減らん。働くにはキ頂かねばならん。キから力生まれるのであるぞ。働くとしても動くばかりでないぞ。動かんのも働き、動くのも働き、よく心得よ。寄せては返し、寄せては返し、生きているのであるぞ。始めの始めと始めが違うぞ。後になるほどよくなるぞ。終わりの中に始めあるぞ。祈り、考え、働きの三つ揃わねばならん。」

読み解き

上に立つ者ほど働かねばならんとは今の社会で云うなら、大きな組織ほど沢山の人を抱えておりそれぞれの人についてエの言霊の心で接するなら、その人数分だけの悩み要望がありそれを光りに向ける言葉を投げかけるにはその数の対応があると云うことになる。働いても力は減らん。とはエの言霊の心で生きている人は常に元のキ アイウエオのエネルギーと一つになっているためその出入りが何時も出来るので力は減らない。働くにはキ頂かねばならん。

そのため心は仙骨前に心を鎮め、何も思わないムにあり、常にイの間（つまり今に）に八父韻を働かす事である。キから力生まれるのであるぞとはキが流れて力となる。流れるためには父韻の働き（つまり人間の意の力）がそこに働く必要がある。

（その働かす方法とか心の状態を合気道の中で稽古しています。つまり相手とのキの関係性で自分の心の使い方を反省しながら、神へ道を探求する方法です。）

働くとしても動くばかりでないぞ。動かんのも働き、動くのも働き 自分の中心はムは動かないつまり中心だからである。でも動くのも働きとは氣とともに身体は動きます（この状態を働くと云うこと）だから中心も動きます。でも全宇宙の中心なので動かないのです。動いたところが中心なのです。

寄せては返し、寄せては返し、生きているのであるぞ。とは同じ所の留まって停止しているのではない。渦のように同じ所に戻ってくるように見えるが進んでいる。春が来て夏冬と過ぎまた春が来て同じ春ではない新しい遙人なり一段ずつ進んでいるのであると云っている。生きている（イの氣をエ「選択＝実践智」らんでいる）だから始めの始めが始めと違うのである。後になるほど良くなるつまり進んでいるから。終わりの中に始め有るぞ、つまり弥栄（いつまでも栄え続く）だから

祈り 「言葉に組み立て宣言することで自分が創造したいであろう形を作る」

考え 「祈りの背後にある思いに心を巡らせる。そしてエの心に有ればその実行するための動き

を創る」

働き 「氣を流しながら身体を使い動くこと」 =イ+動=イの間に心を置いた動き
この三つ揃うことで創造活動が出来上がる。

・ ・ その 67 に続く

ひふみ神示 (10) サブタイトル道 読み解き

その 67

「ウはムであるぞ。ウとは現実界ぞ。ムとは霊界であるぞ。ウもムも同じであるぞ。ムからウ生まれて来ると申してあること、よく心得よ。神の仕組、狂いないけれど、人民には判らねば、それだけこの世界の歩みおくれるのぢや。この世は人民と手引かねばならんから、苦しみが長くなるから、千人万人なら一人ずつ手引いてやりてもやりやすいなれど、世界の人民、動物虫けらまでも助ける仕組みであるから、人民早う改心せねば、氣の毒いよいよとなるぞ。」

読み解き

ウとは現実界 ムとは霊界 ウもムも同じであるとは人間の身体も霊と身体である。この世も同じ構造である現実界は身体 霊界は霊と相対するということつまり心と身体の関係が霊界と現実界の関係 と同じだと云っている。

夜寝ているときは身体を使わず夢を見るつまり霊的世界を体験していると云うことと同じである。でムからウ生まれるとは心の世界で思ったものが、現実界に現われること。しかし 心の世界で生まれるとは言霊で云う先天性の十七音が働くと言葉（言霊）が生まれるその言葉で物事を連想することで物語が生まれる。この時氣の流れが生まれるが頭に映像を映すのに使われる。これは夢を見て居る状態。この時意識は頭にある為に身体の外に氣の流れは起こらない。頭に映像を浮かべること（言霊による氣が）全てが使われる。

目が覚めて身体を動かすときは無意識に言葉（言霊）を使い、氣の流れを起こし身体を動かす。赤ちゃんの時は自然にこのように動く。この状態を今に生きるという。大人になり経験知を積んでくるとスタートは氣の流れを使うが後は惰性で身体を動かす。その惰性の間は心は他のことを考え始める。（その時点から）氣の流れは頭で映像を描くことに使われるため身体を動かすことには使われなくなる（使われる氣は自我「身体 ウ」の保存している氣になる。）大自然（ム）からの氣の流れがストップしてしまう。この状態を今に生きていないということである。こういう生活はすぐ疲れてしまう。氣の消耗が補充されないためである。

心の世界で思ったものが、現実界に現われることは 心で氣の流れを起こし身体が従うことで創造的な活動が出来る。この時は何も考えていないただ中今の状態である。氣の流れがそこにあり身体がそれにしたがって動く この状態であることが何も考えていない自分の中に氣の流れが起こり（神が入る）神業的なものをつくり出すのである。

そういう中今を体得せよ、つまり大人の心を持って赤ちゃんの時に帰れと言うこと

・ ・ その 68 に続く

ひふみ神示 (10) サブタイトル道 その 68

その 68 読み解き

「統一ということは赤とか白とか一色にすることではないぞ。赤あれば黄もあり青もあるぞ。それぞれのものは皆それぞれであって一点のキでくくる所に統一あるぞ。くくると申してもしぼるのではないぞ。磁石が北を向くよう、総て一点に向かうことであるぞ。これを公平と申し、平等と申すのぢや。悪平等は悪平等。一色であってはならんのを。下が上に、上が下にと申してあるが、一度で治まるのではないぞ。幾度も幾度も上下にひっくりかえり、又ひっくりかえりビックリぢや。ビックリこねまわしぢや。」

読み解き

まず中心を決めます。その周りに何重にも渦を意識します。全ての渦状にいる人は全て中心に向きます。動きも渦に従い中心へと向かいます。仮に一番内側にいる人の列は赤その外側橙その外側黄・・・一番外が青とすると 色をその人の個性とします。色々な色があるのはそれで良い、中心に向くようにすることが統一すると云うこと 公平に導くとは色を同じようにする為に行為をするのではなく、同じ所を目指すように導くこと これを平等と言うと云っている。

統一すると云うこと。

色を同じにしようとするのは悪平等。 一色にしようとするのは間違い。でも中心に向かって渦の動きの上を行くとするなら中心に対して上にも行くし下へも行く何度も上下になります。こね回しと云う状況になります。

・ ・ 69 に続く